

何度訪れても飽きない魅惑的な天生湿原と溪谷の花々

靱糠山には毎年登ろうと思っているが、登山口のある天生峠に至る国道360号線の開通時期が毎年変化する。今年22年も6月14日に計画していたのだが、早くも挫折。飛騨市側の開通が6月下旬にずれ込み、白川郷方面からの開通は災害のため秋になるという。昨年は6月と10月の2回登ったが、春も良いが秋のブナ林の黄葉時期も色鮮で美しい。

靱糠山に初めて登った頃は、前夜、天生峠の駐車場にテントを張って仮眠し、翌朝登ったものだが、近年は高山のゲストハウスなどを利用することが多くなった。

天生峠の登山口には、保護団体のテントがあり、登山靴を洗い、入山料500円を払う。登山道は見事に整備され歩きやすく、自然林の中を歩き小さな谷を渡ると獣害防止柵があるのでそれを潜るとすぐに分岐に出る。分岐の右手は下山コース用なので左の道を選ぶ。この道は天生湿原の周回ルートで時計回りに進むと、明るく開けた天生湿原に出る。同じ季節に何度も訪れるが、毎回違う顔を見せるのがこの湿原の魅力なのかもしれない。分岐を匠神社に向かうとタテヤマリンドウの花が湿原に咲いている。シラヒゲソウが咲いている季節もある。今日は、コバイケイソウの白い花が湿原の縁を取り囲むように林立しミズバショウの巨大な葉っぱも負けじと伸び上がる。新緑のブナ林に囲まれた穏やかな湿原を抜け、木平湿原分岐を過ぎるとカツラの大木がある。谷筋を歩くと様々な山野草が出迎えてくれる。ツマトリソウ、ラショウモンカズラ、キヌガサソウ、サンカヨウ、ズダヤクシュ。

谷道上部の木平湿原分岐で休憩し、少し進むと、靱糠山から流れ出て天生湿原を潤している谷を渡ると、ここからしばらくは急坂。標高差100mほど登るが、ツバメオモトやムラサキヤシオ、ツクバネソウの花が癒やしてくれる。

尾根に上がるとベンチがあり休憩できる。ブナ林がダケカンバに代わると急登になる。喘ぎながら登りきると山頂に出る。狭い山頂の背後に猿ヶ馬場山があるが、東側に展望が開け、眼下に木平湿原が見え、ブナ林の山々が広がっている。

下山コースは2つある。ベンチまで下り、そのままブナ林の森を歩いて、ミズバショウ群生地に出るか、沢に下って、木平湿原に登り、モウセンゴケなどを観察し、ブナの原生林を楽しみ天生湿原に下るか。時間的にはどちらも変わらない。

☆歩行時間 4時間程度